

学習院大学身体表象文化学専攻主催、学習院大学文学会／ドイツ語圏文化学科共催

人形と人間

E.T.A.ホフマン『砂男』と
オスカル・パニッツァ『人間工場』を例に

日時：2017年12月20日(水) 18時30分～20時00分

会場：南1号館201教室

講師：木村裕一氏(学習院大学非常勤講師)

本講演では、人形、とりわけ〈動き出す人形〉という対象に、私たちが現在に至るまで持ち続けている夢や不安について、2つのドイツ文学テクストを通して考察することを試みます。扱うのはE. T. A. ホフマン『砂男 *Sandmann*』(1816)とオスカル・パニッツァ『人間工場 *Menschenfabrik*』(1890)です。

両作品を比較することで、産業革命や近代化を挟んだ人形観・人間観の変遷や共通点の一端を垣間見ることができるよう思われます。またこれらの作品における人形／人間の区別、そしてその際に導入される基準や概念の数々は、今まさに技術的なものに対して表明されている夢や不安について反省するためのヒントを与えてくれるに違いありません。